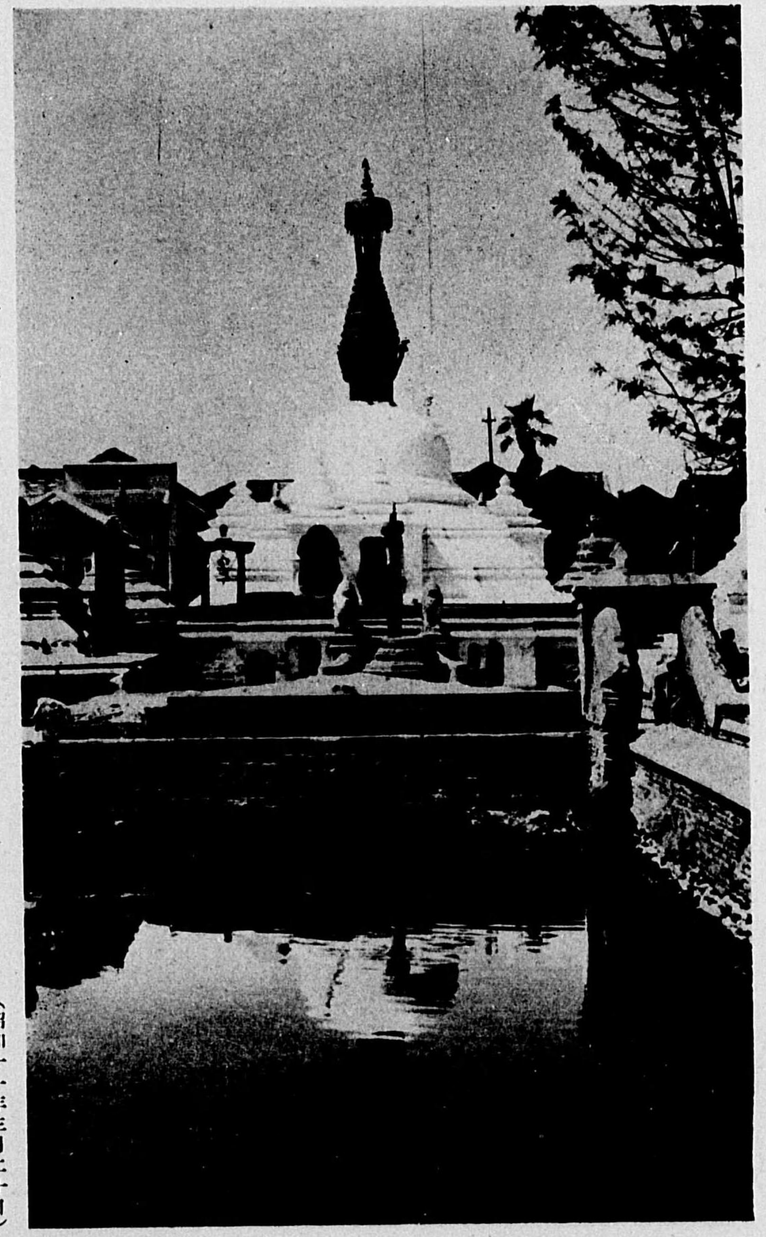
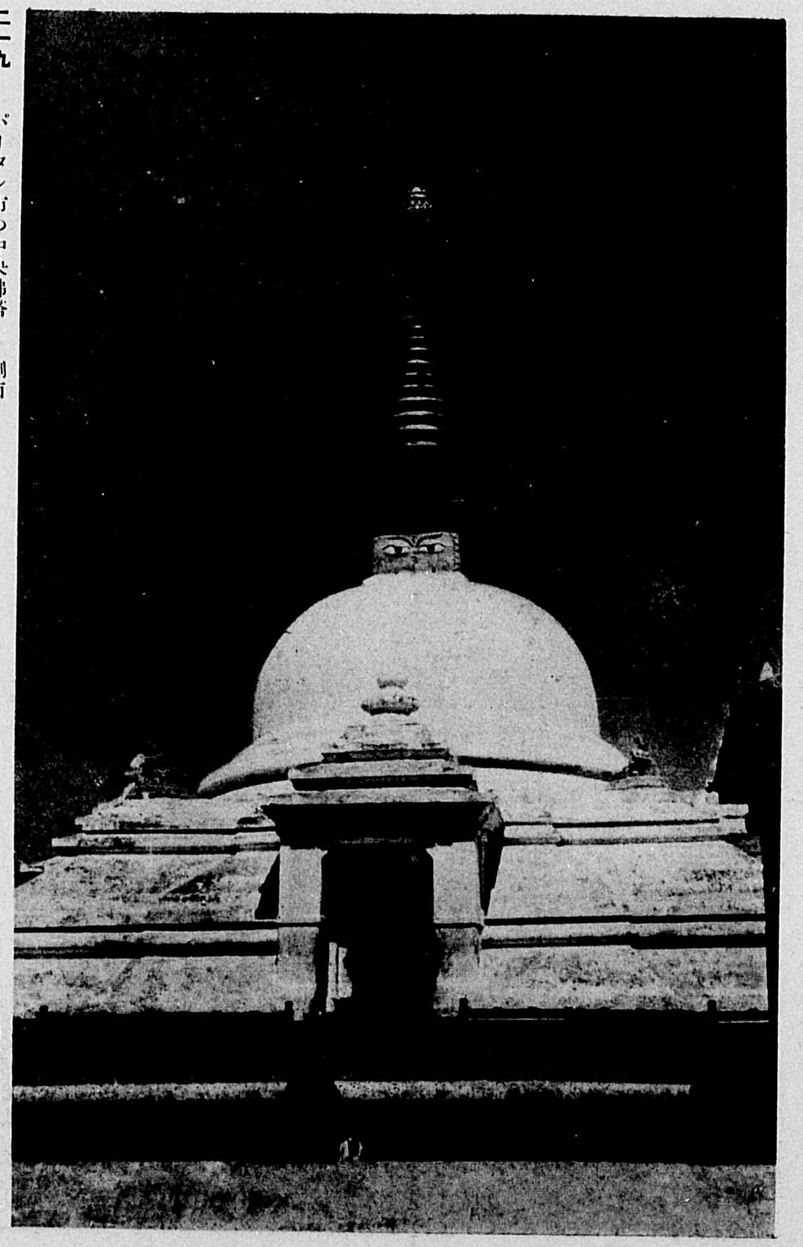


二一八　パータン市の中央佛塔　正面

前圖を近づいてみたもの。とにかく基壇と塔身とは眞っ白で、相輪は金色だから、塗り直してあっても何でも、洵に美しいから、人をして徒倒去るに忍びざらしむるものがある。

（昭和十一年三月二十日）



二一九　パータン市の中央佛塔　側面

實は明らかに判らなかたが、相輪の數は十二らしい。全體の型式はスワヤムブナート寺の大塔と殆んど同樣である。

（昭和十一年三月二十日）

二二〇　パータン市のタンクに近き印度教祠　其一

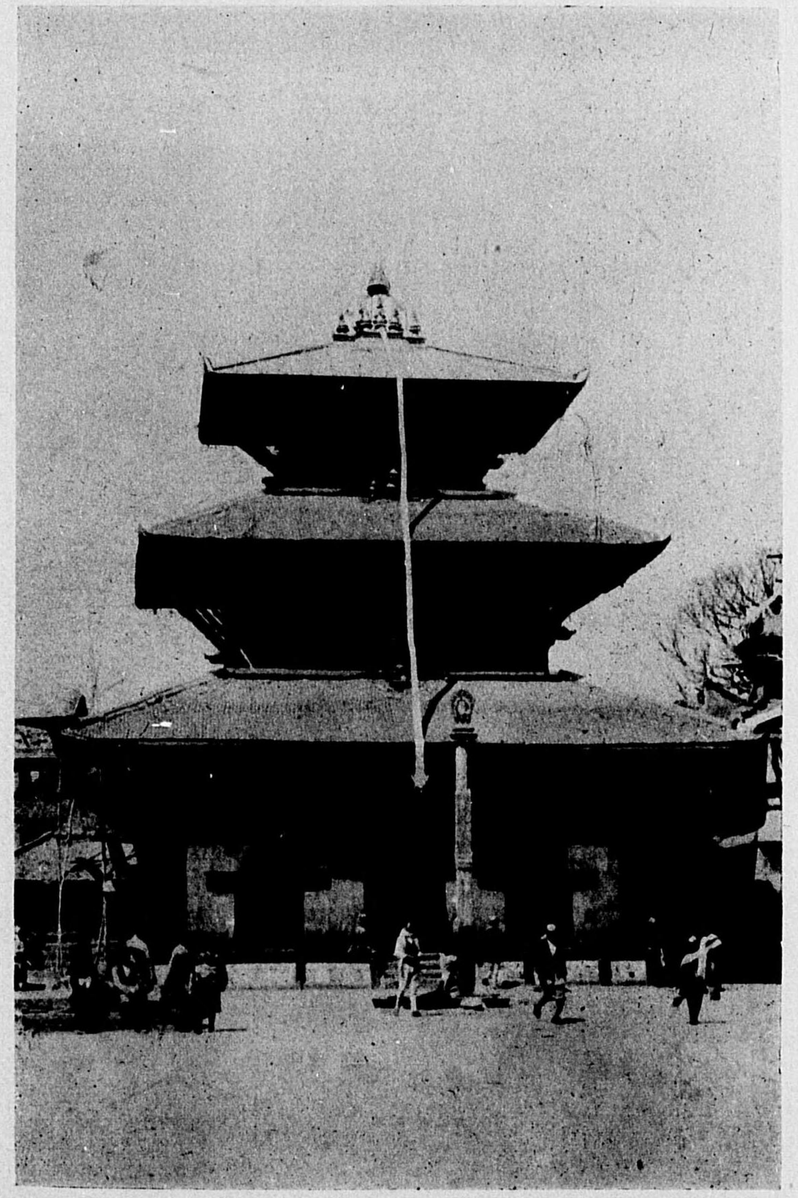
第48頁の圖右端の家の直ぐ右隣にある。もう少し、ほんの少し暗箱を右方に向けたら寫ったのに惜しい事をした。此建物は普通にある三重塔だが、初重正面が一間通り吹放になてゐることと、その平面がゴヒラである事とは、恰もビムセンタン（一九七）（次頁へ）

（昭和十一年三月二十日）

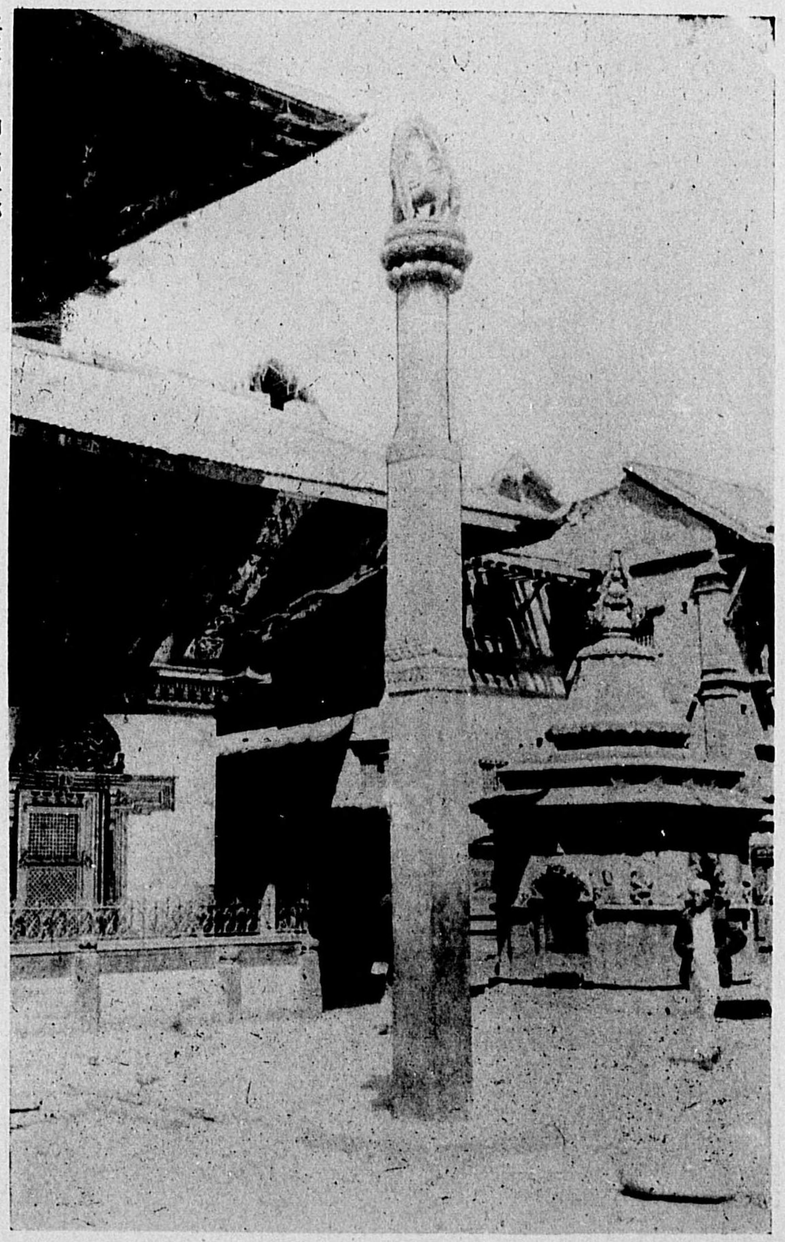
二二一　パータン市のタンクに近き印度教祠　其二

（前頁より）の様だし、あれに比べると遙かに小さいから、大さからいふと大したものではないが、何分池畔にあるので、非常に風致を添えてゐる。屋上の飾、及び前方にある獅子と並べる小建築の屋根の形に注意せよ。

（昭和十一年三月二十日）



二二二　パータン市の印度教祠の一　（昭和十一年三月十八日）



二二三　同上の一部　（昭和十一年三月十八日）

二二四　パータン市のマハ・デバ堂（右）とクリシュナ堂（左）

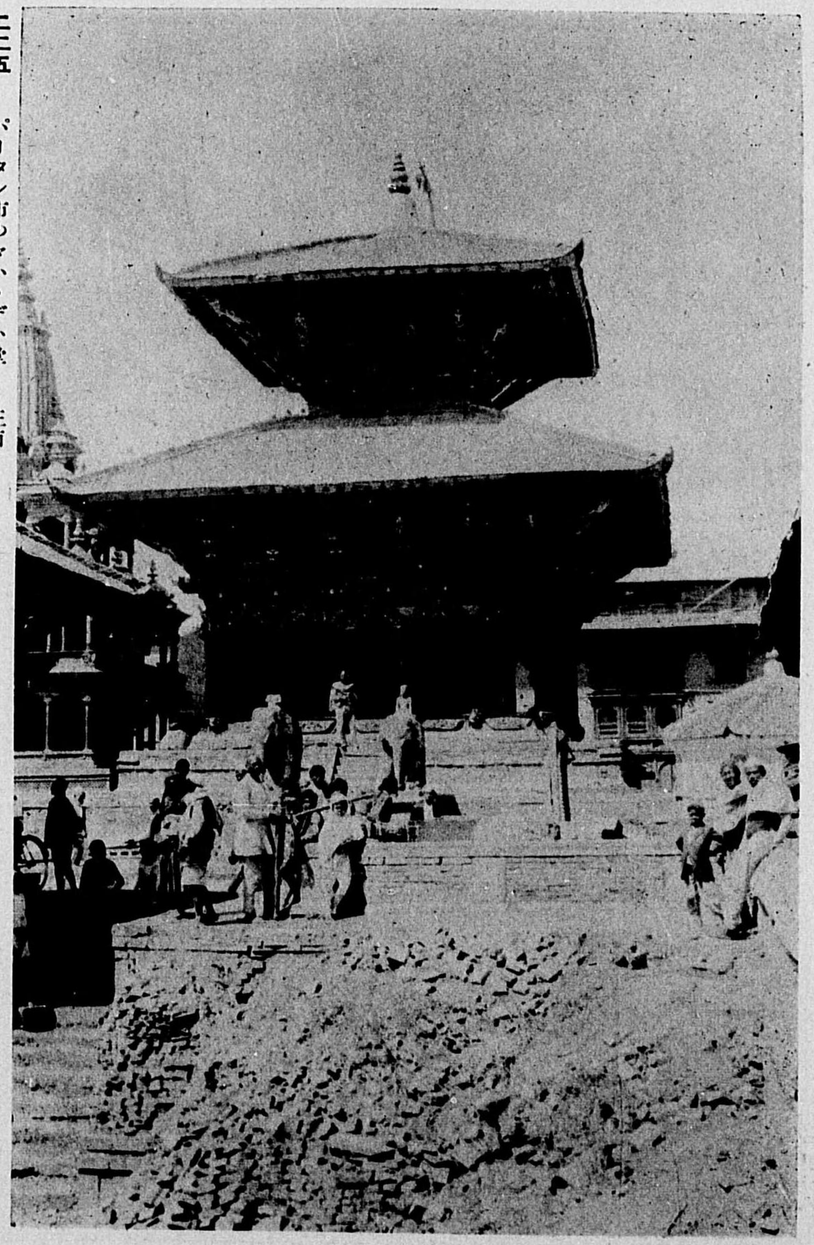
（コアガッソン・H. of I. & E. Aより）

158　Temples of Mahâdeva and Krishnâ Patân　(From a Photograph.)

二二五　パータン市のマハ・デバ堂　正面

震災後の現狀、前圖と比較せよ。左方にクリシュナ堂の一部が見えてゐる。

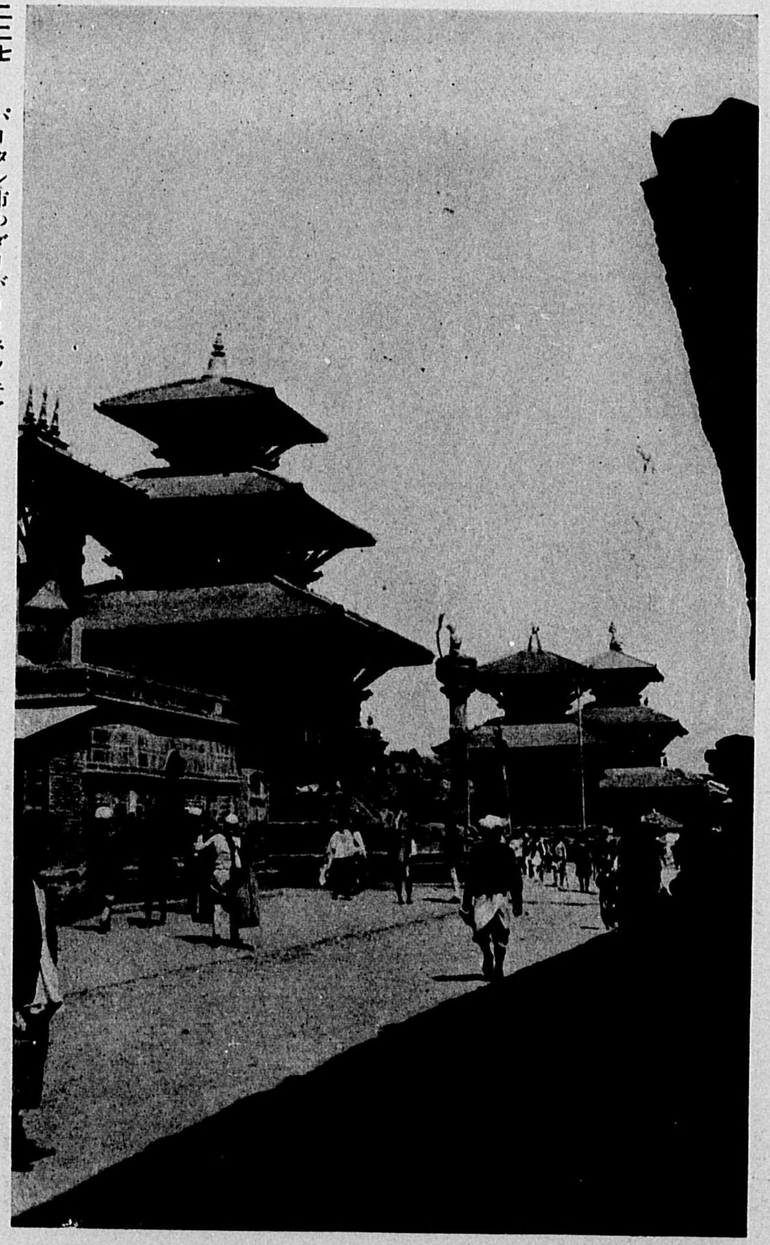
（昭和十一年三月十八日）



二二六　パータン市のマハ・デバ堂　側面

マハ・デバ即ち濕婆を祠った堂を近景に、二二二の堂の側面を背景にみたところ。

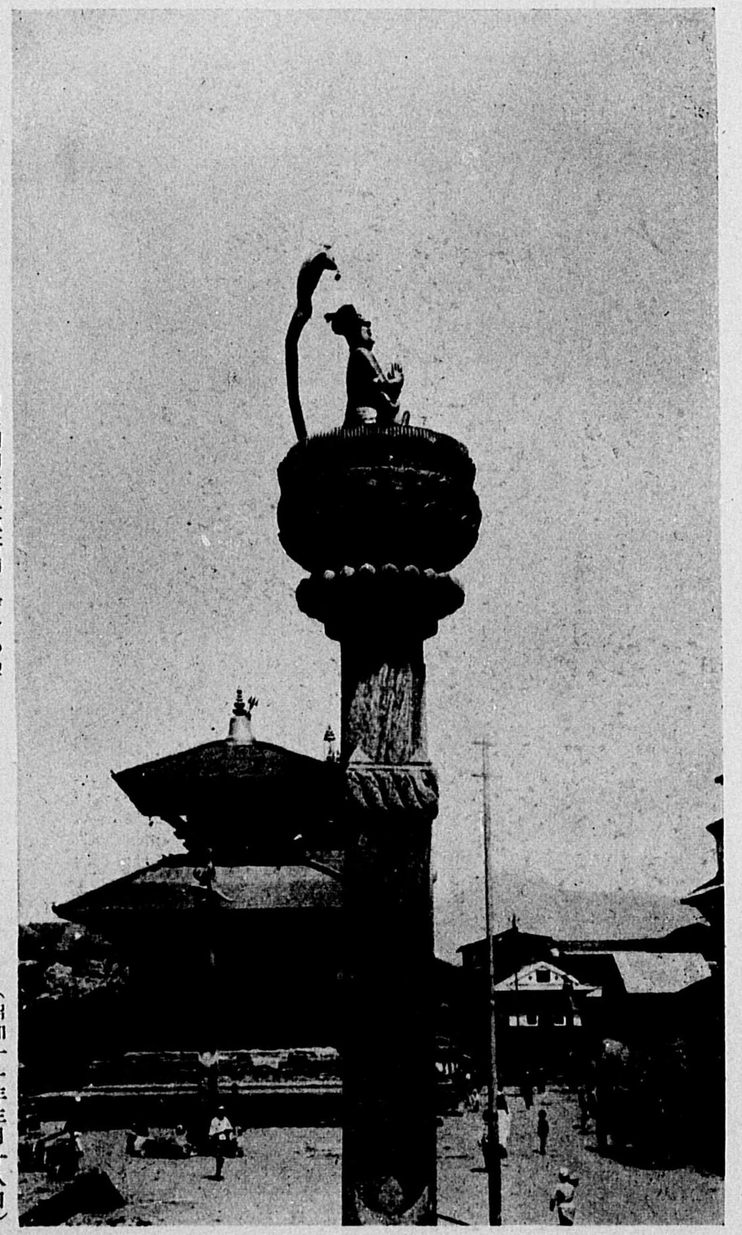
（昭和十一年三月十八日）



二二七　パータン市のダーバー・スクエア

前頁の圖の二堂を遠景に、更に三重塔と吊鐘とを近景にみたところ。

（昭和十一年三月十八日）



二二八　パタン市ダーバー・スクエアの單列周柱三重塔前ラジャの像

前圖に見えてゐる三重塔前に樹てる方柱上のネワールラジャの座像。名を逸したが、眼鏡蛇がかつぎをひろげて光背になってゐるところが面白い。其後方二重塔は第56・57・58頁に掲げたマハ・デバ堂で、此圖には屋上金鈴の傍に濕婆を象徴せる三叉戟が殊に明らかに現れてゐるからよく判るであらう。

（昭和十一年三月十八日）

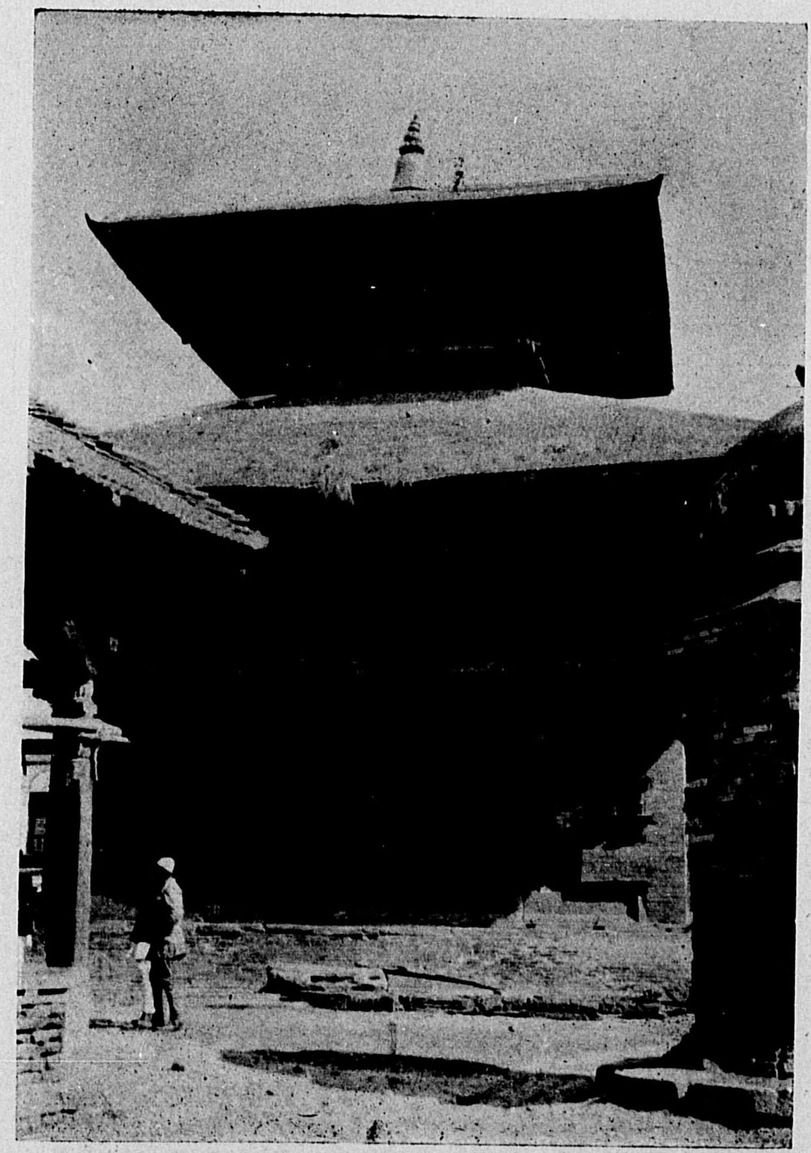
二二九　パータン市のダーバー・スクエアの單列周柱三重塔

前前頁に最大に寫ってゐる三重塔と同じもの。三層の基壇上にたつ五間五面單列周柱堂。

（昭和十一年三月十八日）

二三〇　印度教祠堂初重出入口上彫刻　（昭和十一年二月十八日）

出入口や窓等は常に枠を木にて造り，それに出来得る限り精巧な彫刻を施す。全景をとるのに力を入れたので，細部はさう鮮つしでないから，幾多の好例を示し得ざるを遺憾とするものであるが，まあ申譯にこれをだしておく。此は**二二五**，**二二六**に掲げたマハ・デバ堂初重出入口の上の一例である。



二三一　バートガオンのダーバスクエアに於ける三重塔

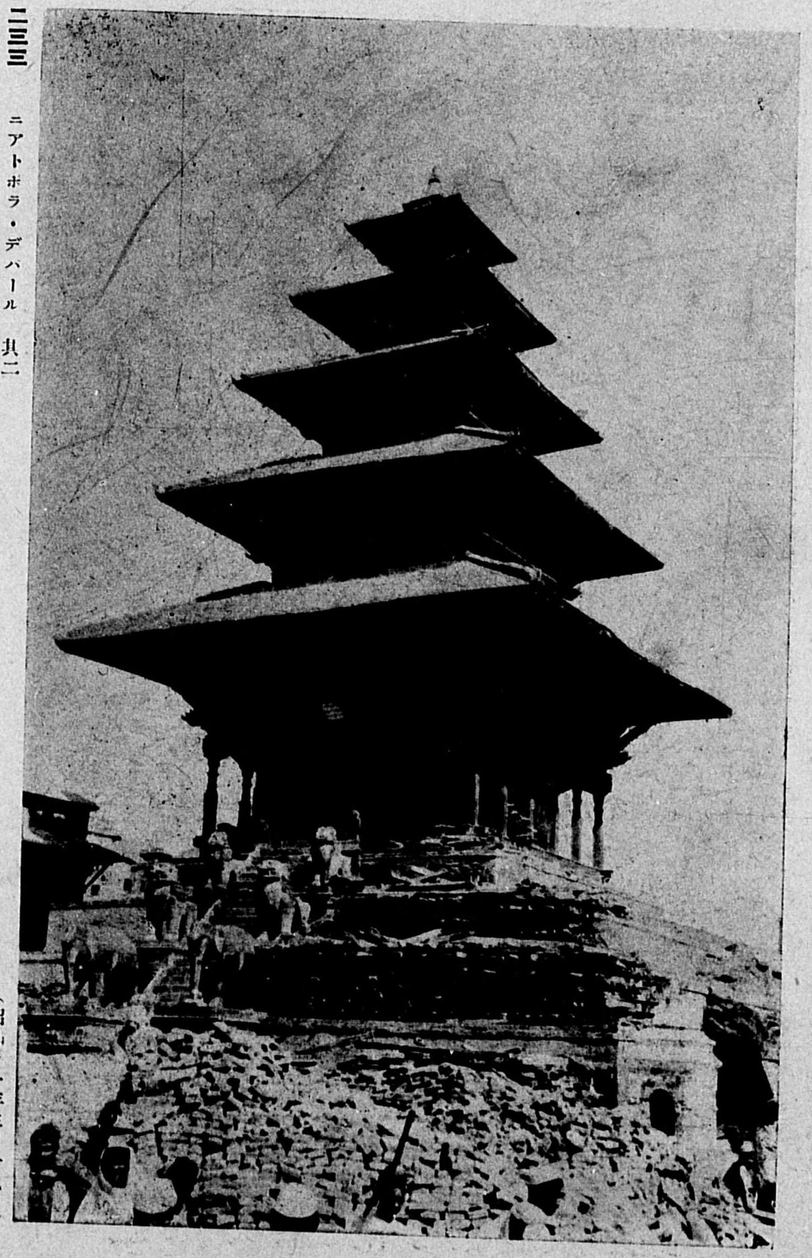
（昭和十一年三月十九日）

形も大分見劣りがするが，大概破損した今日では，正に貴重品である。

二三二　ニアトポラ・デバール　其一

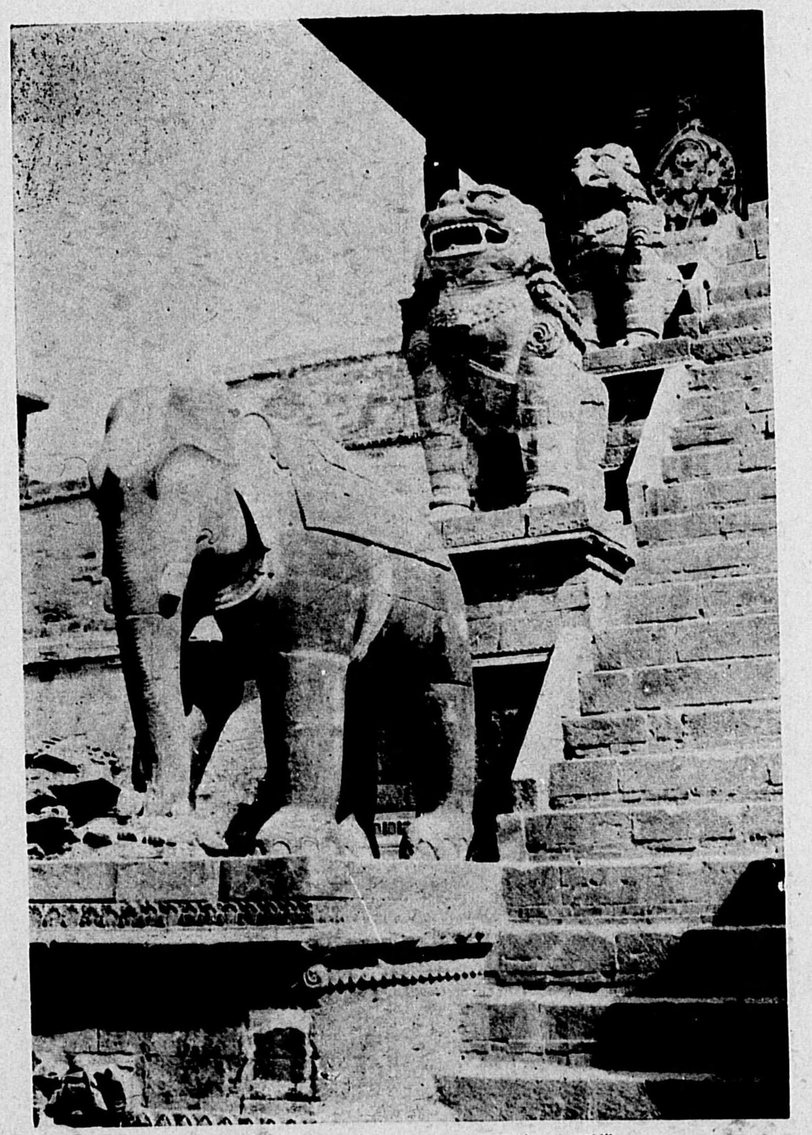
ネパル國に於いて、私のみた唯一の五重塔。震災で壊れた建物の木材を、全部基壇の上に積んでしまったので、其美觀は可なり割引されたが、それでも大したもので、此建物が震災に無事で、今この勇姿を拜めるのは、何といっても有難いことである。

（昭和十一年三月十九日）



二三三　ニアトポラ・デバール　其二

（昭和十一年三月十九日）



二三四　ニアトポラ・デバール基壇上の石像。
（昭和十一年三月十九日）
象から上の四つだけ大きくだしておいたが，上から二番目のグリフォンの様なのが面白い。日本なら神社にゐる高麗犬が，いつも頑張てゐる。

二三五　ダタットラヤ祠前の石柱
有翼の人像がのってゐるが、迦樓羅（Garuda）天から變形したものか。ここばかりではない、カトマンヅにもパータンにも印度教祠其他の前に臺座上によく見出される。
（昭和十一年三月十九日）

二三六　ダタットラヤ祠其一正面

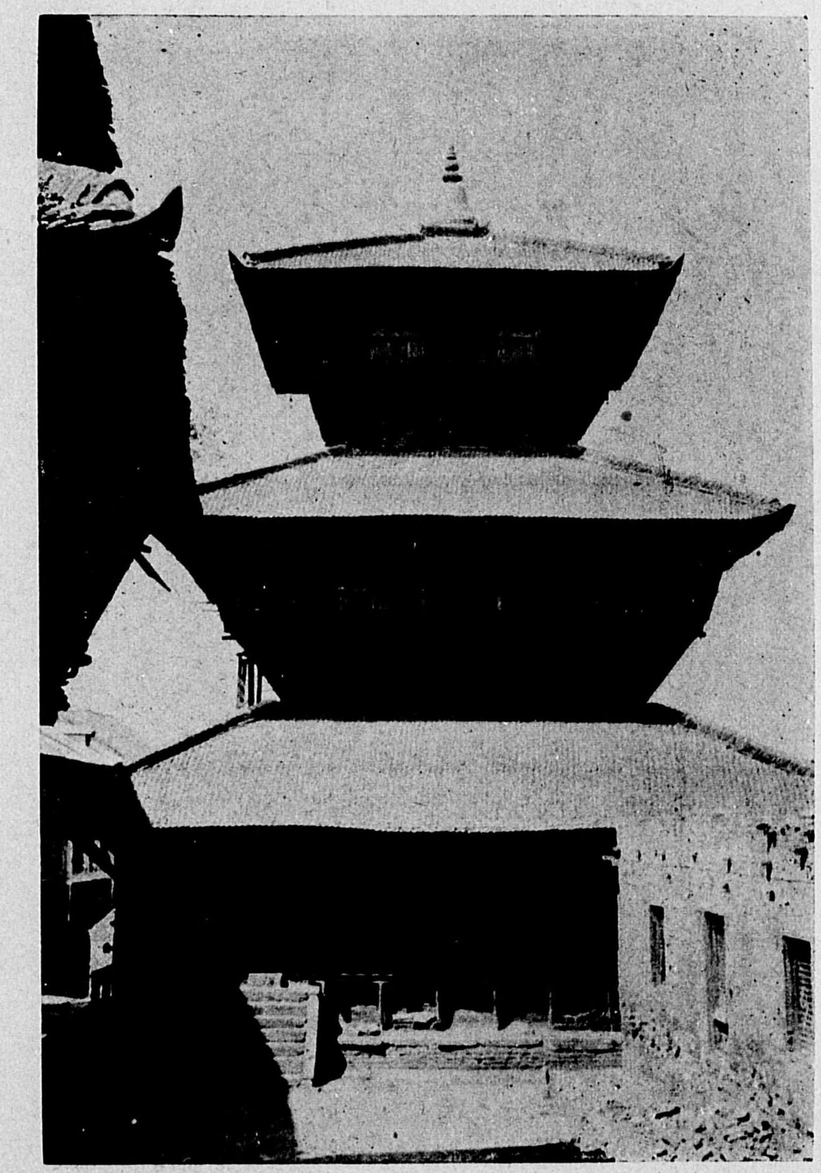
（昭和十一年三月十九日）

五重塔の建ってゐる廣場から少し先の方へ行くと，また廣場がありその一番奥のところ即ち突き當りに，此三重塔が建ってゐる。前の方に二重の突出した部分があり，それが本屋にとりついてゐるため，見たところも餘程變ってゐるし，從って隨分賑かである。前の方からみた時は，此兩圖の樣に，恰好も頗る面白い，（次頁へ）

二三七　ダタットラヤ祠其二斜左面

（昭和十一年三月十九日）

（前頁より） 裏面の方は二三八に示した樣に，胴體が短かくて首ばかり長く，見たところは不愉快である。兩側面も往來の幅が狹いので，さうあらは見えない。二重の基壇上に建ってゐるが，此が五重位であったらさぞよからう。



二三八　ダタットラヤ祠其三背面

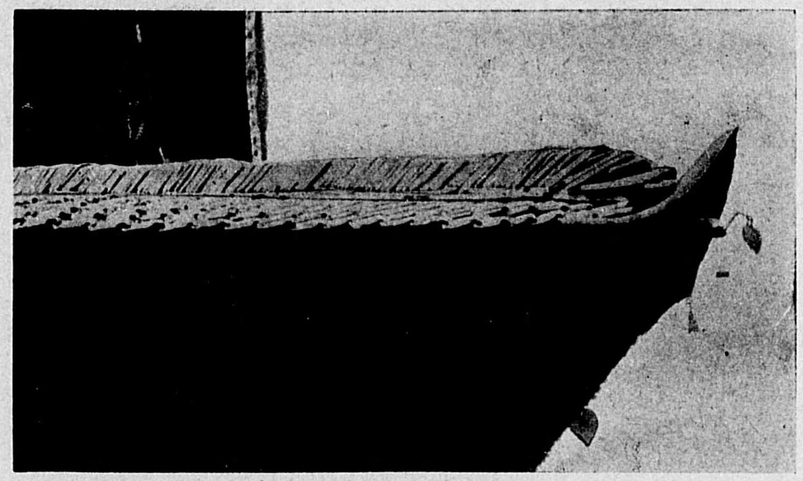
（昭和十一年三月十九日）

震災で裏の建物が壊れたので，此寫眞をとることができたのである。

二三九　ダタットラヤ祠初重軒隅

（昭和十一年三月十九日）

我國の建築に比べると、隅降棟の瓦の配置が洵に幼稚である。詳しくみたのではないから、誤ってゐるかも知れぬが熨斗瓦を二枚ばかりおいた上は、平瓦を將棋倒しにした樣で、甚だ粗末である。隅から風鐸が下ってゐるところが大分氣に入った。序に町の家も屋根にドルマー・ウヰンドーがあるので氣に入った。

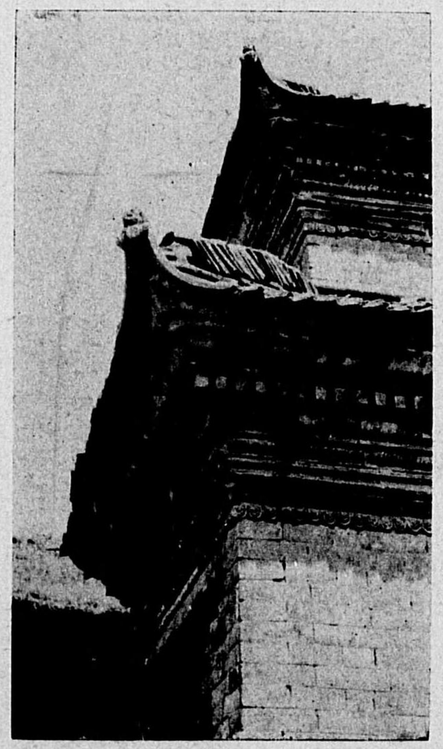


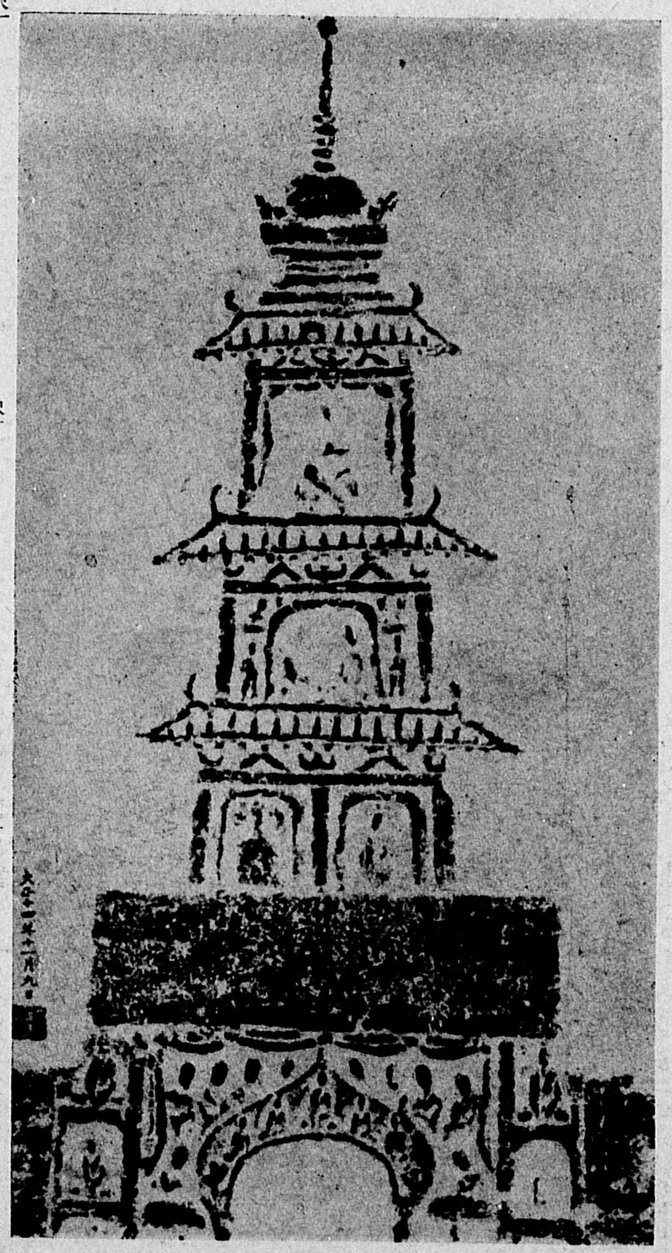
上。**二四〇**　ゲタットラヤ祠初重軒隅　其二

下。**二四一**　バートガオン市の小祠軒隅

（兩圖共　昭和十一年三月十七日）

隅の瓦は上下圖共特殊の形で、上のはただ單に反轉してゐるだけが、下のは人の上半身がつけてある。大概こんな意匠からできてゐると思へばよろしい。上の圖は少し加減をして軒裏のところを見せたもので、鼻隱板の隅のところに飾金具を用ひ、上の方から木葉の樣な飾りをだしてゐる所が面白い、下圖軒に蓮花瓣の展開と、デンチルの樣な裝飾がつけてあるのは見逃せないと思ふ。





二四二　支那、山西省大同府、雲崗石佛寺石窟內薄肉陽刻三重塔拓本

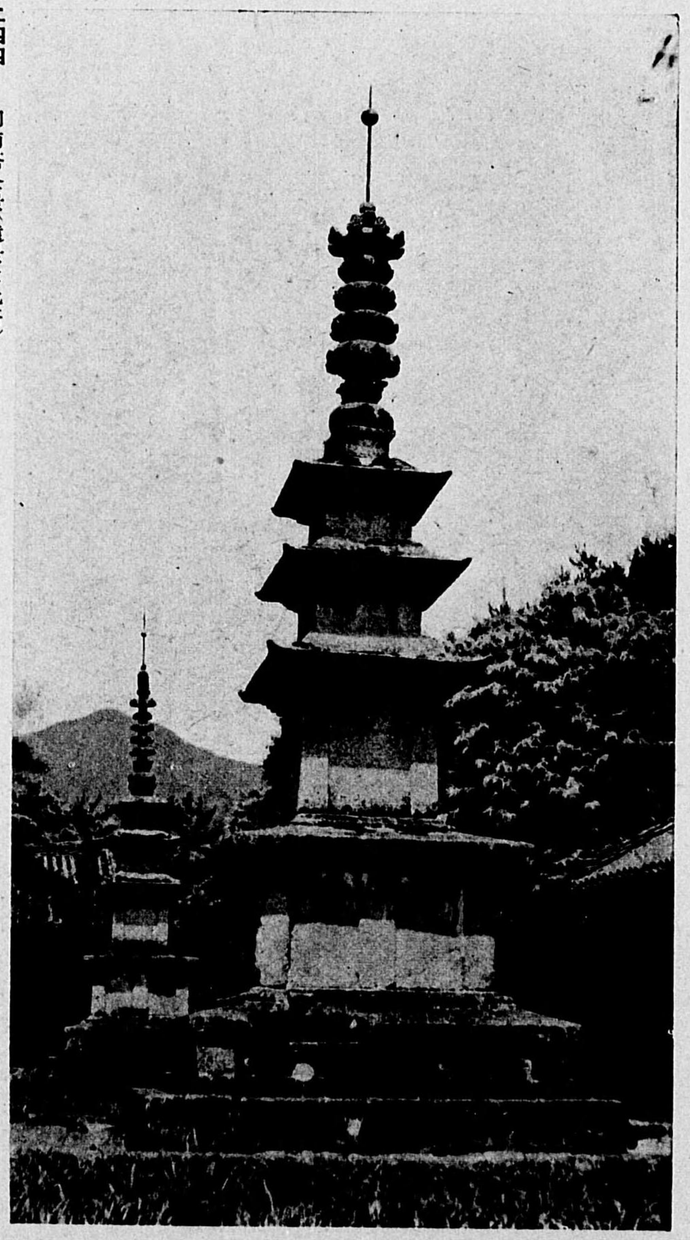
各重臺輪、枓栱、枓栱間の割束、鴟尾等、特に最上部の卒塔婆及び相輪に注意せよ。支那には此種の木造塔婆の古いものは今一基も殘つて居ない。

（大正十四年十一月九日手拓）

二四三　朝鮮全羅北道南原郡山内面大井里　實相寺北塔全景

（昭和十二年六月十二日）

南原邑から山内面迄バスを通ず、而事務所の前から川を渡ると直に寺であるから、行くには至極便利である。兩塔共幸に殆んど完全に保存されてゐる。此頁の塔は卽ち次頁に遠景に見えてゐるものである。兩塔共花崗岩より成り、相距る事約四十尺、塔各高約二十七尺、兩塔の全景を掲げたのは、塔身と相輪との割合をみせる爲で、内地に於ては飛鳥・奈良時代の石塔――といっても（次頁）



二四四　同南塔全景（遠景は北塔）

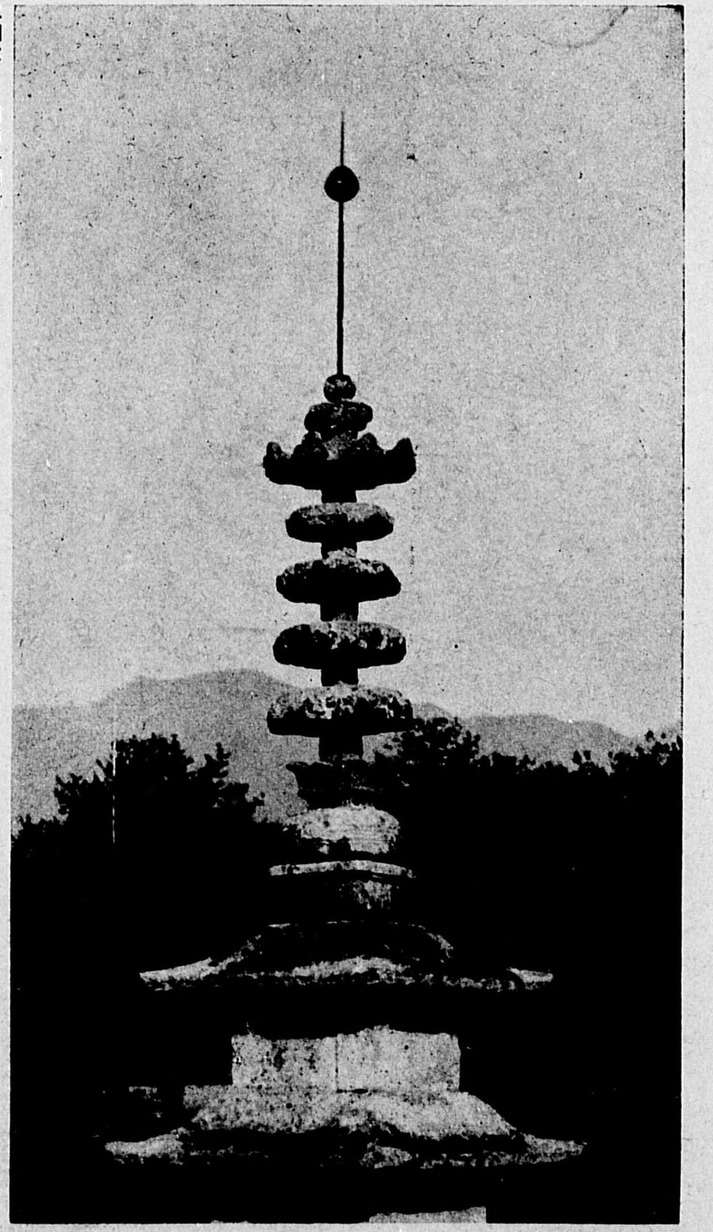
（昭和十二年六月十二日）

（前頁より）僅に一二例に過ぎぬが――を通じて、この様な美しい相輪をもったものはない。殊に北塔は石製の水煙を存してゐるのは珍とするに足る。尙ほ覆鉢上の方形の請花に注意せよ。

二四五　朝鮮全北南原郡山内面大井里　實相寺北塔相輪

伏鉢は内地の塔婆と異なり、球を上下につぶした様な形をしてゐるから、これでは「伏鉢」といふ名稱が甚だ不適當で、饅頭型もいけない。少しかた苦しい名だが、やはり回轉體とでも言はなければ工合がよくない。其上の請花は方形で、上に八枚の花瓣がついてゐる。卽ち四隅に一枚づつと、間に一枚づつとあるが、これは頗る面白いことと思ふ。既に第一回から附圖に多く示した（次頁へ）

（昭和十二年六月十三日）



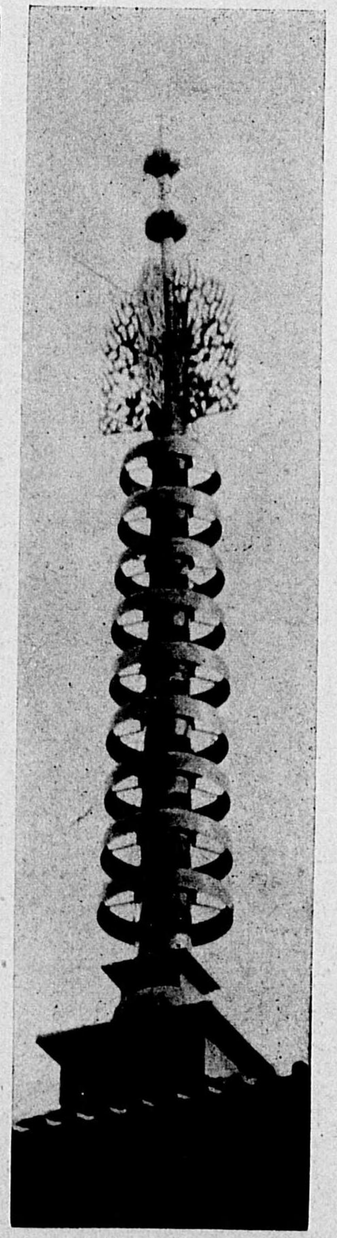
二四六　同南塔相輪

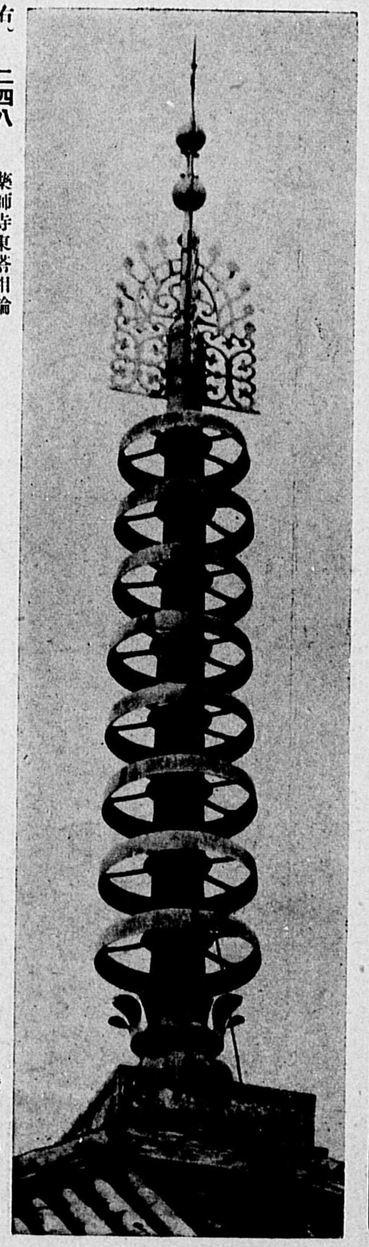
（前頁より）ように、印度・錫蘭等の塔婆、及び窟院等に半肉に刻された塔婆の平頭には、花瓣の様なものは全くなかった。それがいつどこで出來たかは未だ調べてゐないが、この場合四角なところに八枚の花瓣をつけてゐるのに注意せねばならぬ。

（昭和十三年六月十三日）

二四七　藥師寺東塔（飛鳥園）

本圖の目的は相輪にあるが，特にその全景を示した。

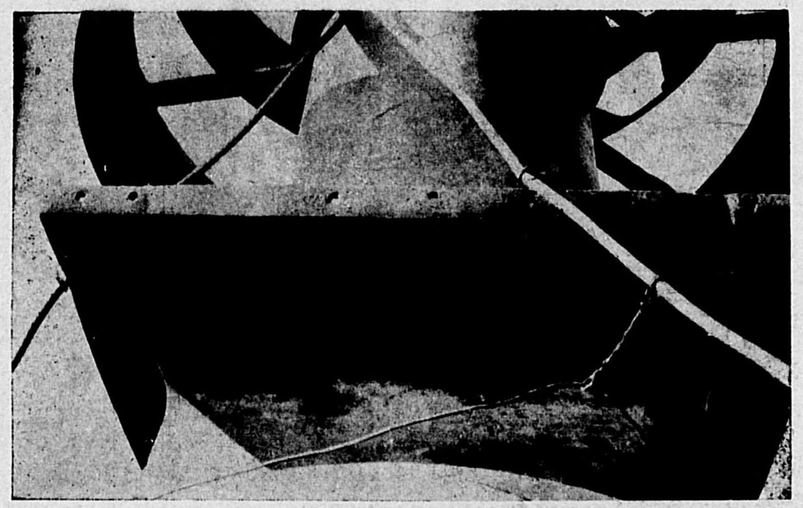




右、**二四八**　藥師寺東塔相輪（飛鳥園）

左。**二四九**　當麻寺西塔相輪（飛鳥園）

共に「伏鉢」及び「請花」に注意せよ。右は方形で花瓣を缺いてゐるが、左は圓形で立派な花瓣がついてゐる。請花が圓形になったのは奈良後期か平安前期位ではあるまいかと思ふが、證物がなくて判明しない。

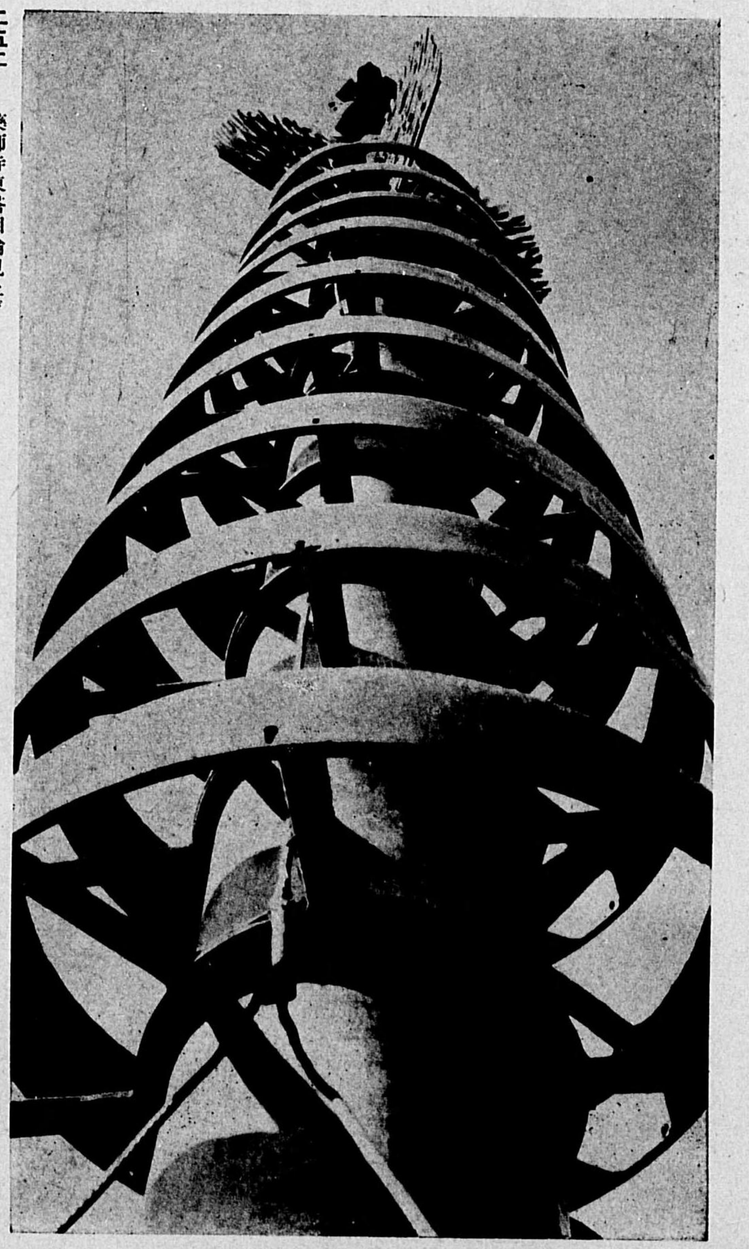


二五〇　藥師寺東塔伏鉢及び請花一部　其一

二五一　同　其二

（兩圖共昭和十三年二月十三日）

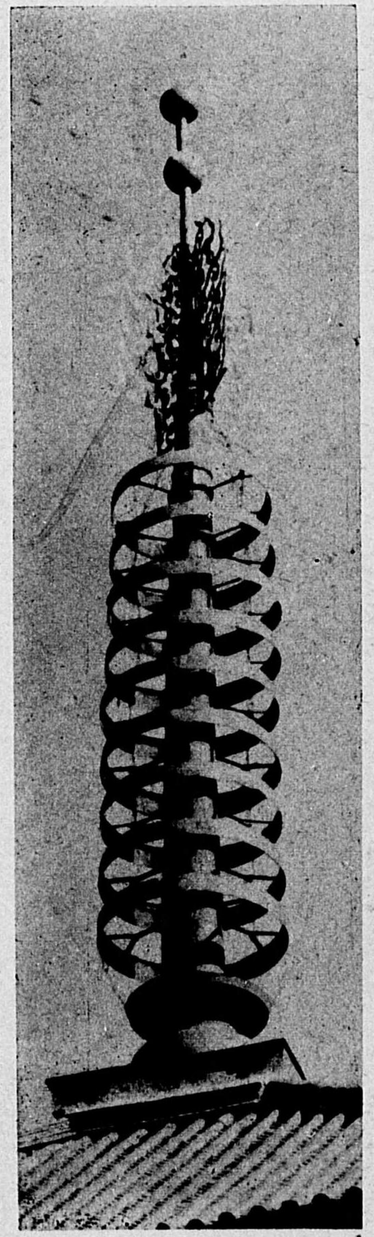
前頁の右圖の請花の部分を擴大したもの。請花は方形の平面で三段の繰出しがあるが、其最上の部の側面に七個の小孔を穿ってある。兩端に二つづつ接近したものと中央に三つ幾分間がはなれたものと見えてゐるが、これは實相寺塔婆のと同樣に、四隅に一枚づつと、中央に一枚づつと、八葉の花瓣のあった事を物語ってゐるのである。



二五二　藥師寺東塔相輪見上げ

前頁二圖、殊に上圖に明らかだが、第一輪の殆んど全形が此圖に出てゐる。以上第九輪迄及び其上部の水煙と珠とを一緒に見上げたもの。三圖共避雷針の導線が甚だ目障りだが、それを我慢するとして、從來餘り流布してゐない寫眞が出來上った。

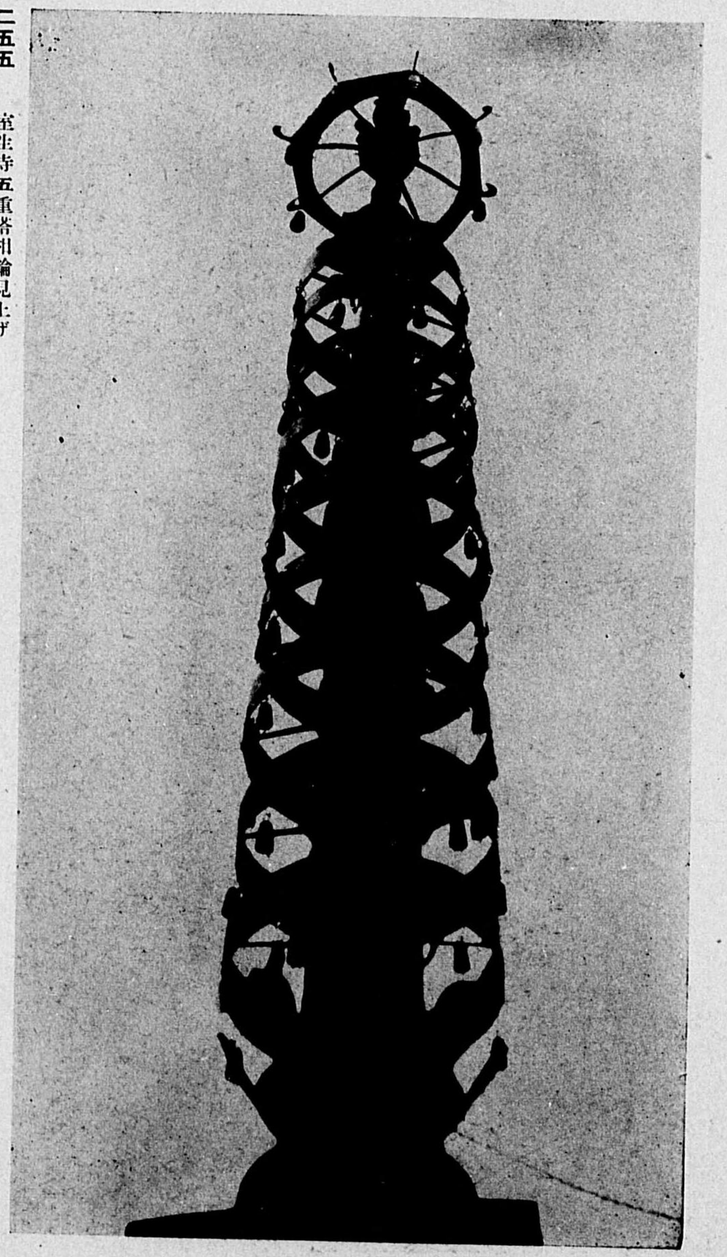
（昭和十三年二月十三日）



二五三　室生寺五重塔相輪（飛鳥園）

二五四　醍醐寺五重塔相輪（飛鳥園）

右圖は水煙の代りに蓮花にのれる寶瓶と天蓋があるので有名。左圖は請花が圓形で花瓣を缺いてゐる（當初はあった樣である）のと、塔身半分以上の長大な相輪のために有名。



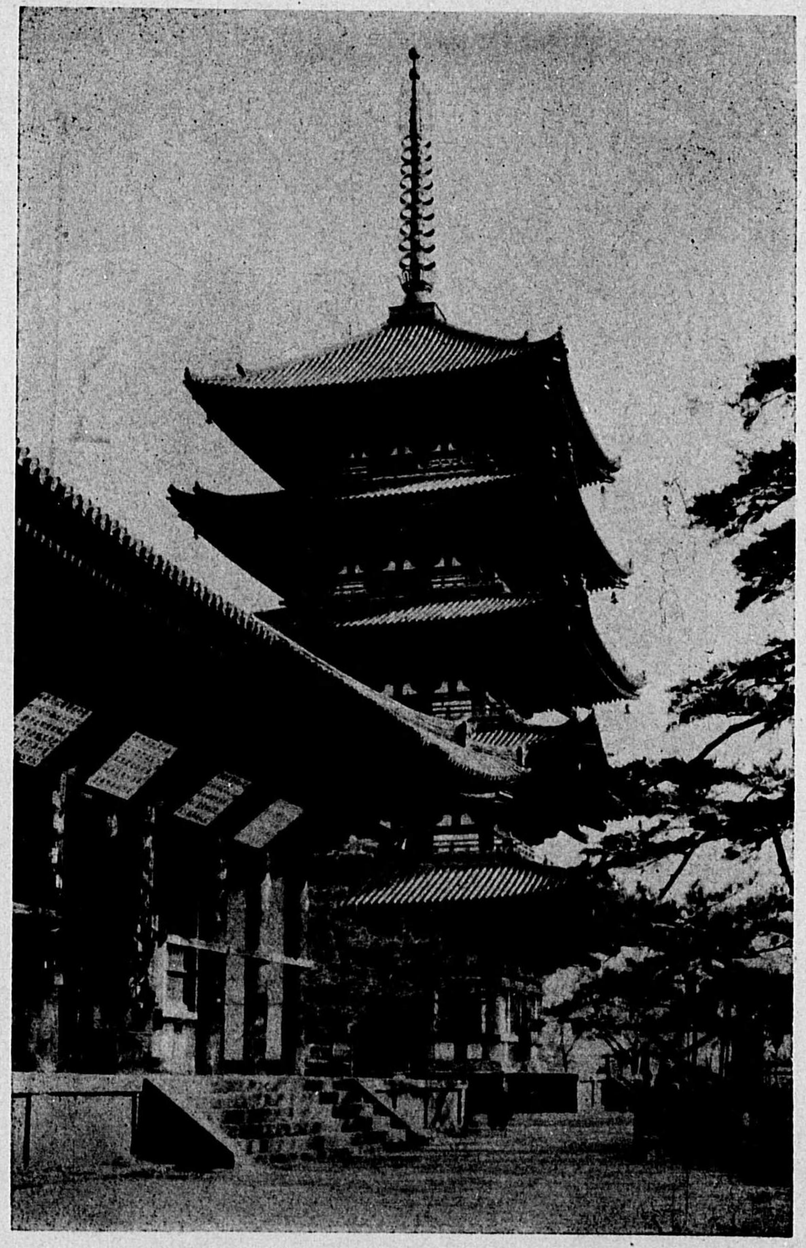
二五五　室生寺五重塔相輪見上げ（大正十三年五月十八日）

藥師寺のは露盤の直下、天窓から出てとったからほんたうの見上げになったが、これは天窓がなく、五重目の軒先から上を向けて寫したから、あれ程圓錐形にはならなかったが、要は蝙蝠傘をひろげた天蓋を、割合に明らかに見せるためである。

二五六　京都府相樂郡當尾村大字岩船、　岩船寺塔婆相輪

請花の花瓣が非常に發達したころを見せたもの。請花の各々の瓣の間を透かして、この樣にしだしたのはいつ頃からのことか知ぬが、今の所鎌倉以降と考へてゐてよささうに思ふ、果してさうなら、もっと古い例もあらうが、今手許で手近に探しだすことができたのはこれだから、鎌倉末とは思ふが、これで間に合はせておいたのである。

（昭和三年十月十三日）



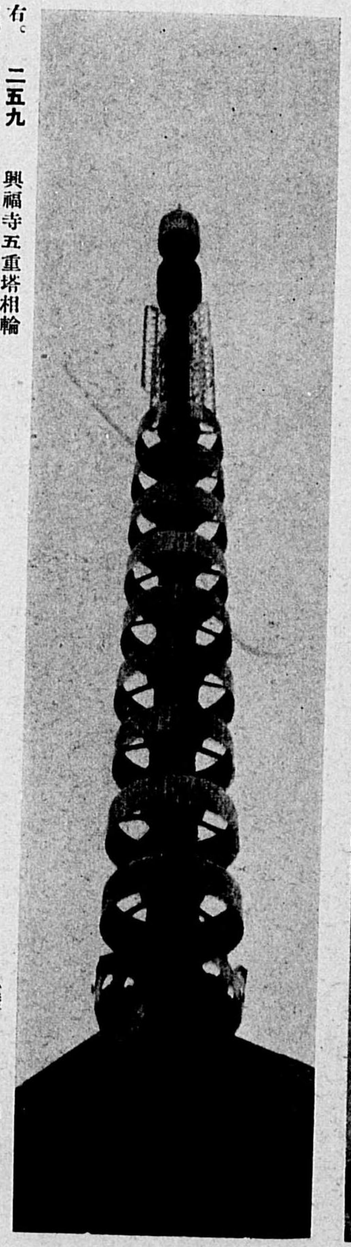
三五七　興福寺五重塔及東金堂

（飛鳥園）

二五八　眞正極樂寺（眞如堂）三重塔

一月十三日に京都では雪が降って少し積った。直に溶けて了ふ處があるので、早く出かけて行って本堂の椽から寫っしてみた。邪魔物があったり、樹木があったりしてうまく行かないが、先づこの樣に地面が白くなると、幾分はっきりするから、これで塔身と相輪の割合が判るであらう。此塔初重椽勾襴寶珠柱に「寶曆四甲戌年五月二十九日」・「寶曆五年亥六月」・「寶曆六年子五月日」等の刻銘がある。

（昭和十三年一月十三日）



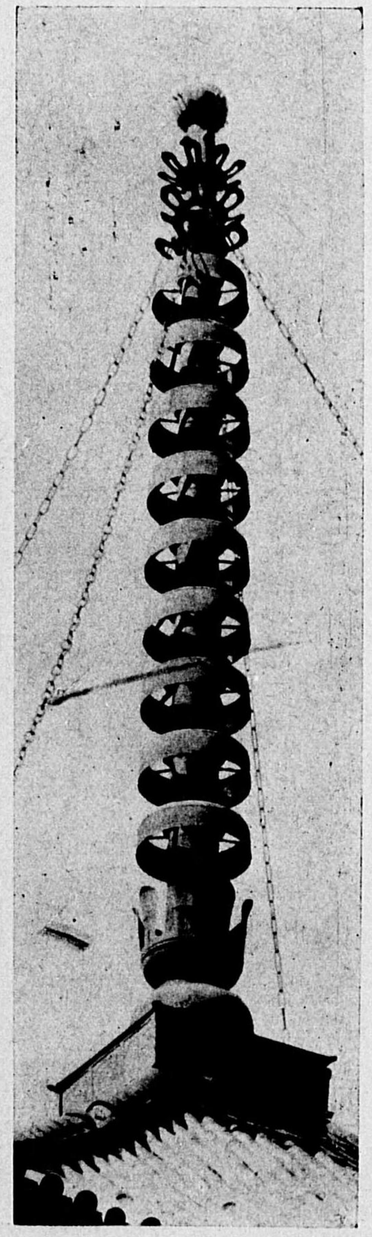
右。**二五九**　興福寺五重塔相輪

左。**二〇六**　眞正極樂寺（眞如堂）三重塔相輪

以上掲げた相輪のうち、眞如堂のが最新であるから、これを古いところから順に比べてみると、誰でも容易に其型式の變遷が了解できるであらう。

（雅　鳥　園）

（昭和十二年十一月十六日）



右。二六一　大傳法院多寶塔（根來寺大塔）相輪
左。二六二　輪王寺（日光）相輪樑

（飛　鳥　園）
（昭和十一年七月二十五日）

多寶塔の相輪は水煙の代りに、下から四・六・八瓣の請花をおくのが普通である。其一例として右圖を掲げたが、左は輪の代りに全部蓮花瓣を以てした、どちらかといふと變形した、換言すれば墮落の傾向を有する相輪樑で、蓮花ばかりにしたのは右圖の樣なものから、暗示を得たのかも知れない。此相輪樑は天台宗に限られた樣で、創建のままではないが延曆寺にあるのが古式である。

昭和二十年十二月二十日初版印刷
昭和二十年十二月廿五日初版發行　二、〇〇〇部

印度佛塔巡禮記　下册
㊙定價金拾八圓
特別行爲稅相當額　金貳圓
合計金貳拾圓

著者　天沼俊一（アマヌマ シュンイチ）
發行者　田中太右衛門
印刷者　奈良縣丹波市町川原城三〇七　岡島善次
製本者　奈良一

（出版會承認）う160085

發行所　大阪市阿倍野區阿倍野筋二丁目三四　株式會社　秋田屋
振替口座大阪五一四〇番
會員番號三四二〇〇七番

配給元　東京都神田區淡路町二丁目九　日本出版配給統制株式會社

配給元　東京都麻布区霞町二丁目九番地　日本出版配給統制株式會社

正誤表

其後上冊中に誤植を發見したから、此際下冊の分と共に記しておく。

上冊

頁・行	誤	正
三・11	(ndian Museum)	(Indian Museum)
三三・1	ペシャワー	ペシャワー
三四・10	習十二日	翌十二日
三〇一・1	でもなら思はれ	でもならと思はれ
三二三・六	第315—318頁	第315—317頁

上冊圖版解説

六・四	(本文第207頁參照)	(本文第272頁參照)

下冊

頁・行	誤	正
三・七	客ばかでは	客ばかりでは
三九・註四	Temporay	Temporary
三〇・九	(第3頁)	(第5頁)
四九・四	遠藤・先生	遠藤。先生
六・三	(第1246・6頁・第)	(第1266・6頁・第)
六三・三	新築・中	新築。中
一〇一・1	Kindy	Kindly
一一七・七	第122頁	第118頁
一三・一	眼で弼みつけ	眼で睨みつけ
一四・五	探すたらば	探したらば
一四・八	阿口伽	河口伽
一一九・三	PIOTURESQUE	PICTURESQUE
三一・挿圖		右を上にする事
一四・1	Storieb	Storied
同・註	EOERSCHMANN	BEORSCHMANN
一四六・1六	elephauts, aud	elephants, and
一四七・八	Levj	Levi
同・10	fheory	theory
同・11	dispaiue	disparue
一四八・四	rher	their
一四九・六	壇・基	基。壇。
一五一・八	列く	例。く
一五七・11	(Shelk's Tomb)	(Sheik's Tomb)
一三一・九	象	豚。
一三四・五	くな一人	な。く一人
一三九・三	腸羅・扶斯	腸窒。扶斯
同・1六	ベ・ス・	ス。ベ。
一三九・四	方格樣内	方格文。樣内

下冊圖版解説

八・四	圖・形	四。形
三六・二	重・縱	縱。縱
三七・三	二・又・載	三。又。載
六一・二	單列周桂・柴	單列周柱。柴
六五・1	三・五七	二。五七
六七・二	二〇・六・	二六。〇

以上

殊に下冊はいろいろの事情があったにせよ、校正が厳る杜撰で誤植が多いのは、洵に申譯のない次第である。御諒以上の他にも見落しがあるかも知れないが、推讀を乞ふ。

昭和二十年九月十五日　著者

昭和二十年十二月二十日初版印刷
昭和二十年十二月廿五日初版發行　二〇〇〇部

印度佛蹟巡禮記　下册

著者　天ア沼ヌ俊シュン一イチ

含計　金貳拾圓　相特別常行爲稅　㊞定價　金拾八圓

ラ160085

96
100

終